

第45回全国高等学校・中学校剣道（部活動）指導者研修会



第45回全国高等学校・中学校剣道（部活動）指導者研修会（主催＝日本武道館・全日本剣道連盟・全国高等学校体育連盟剣道専門部・日本中学校体育連盟剣道競技部）は、1月4～6日の3日間、千葉県勝浦市の日本武道館研修センターで実施された。

今回は、新型コロナウイルス感染症対策として、参加募集定員を縮小したため、高校の部を対象に、会期を前半（東日本24名）と後半（西日本23名）の各々1泊2日に分けて実施。部活動の理解を深め、剣道の専門的な知識と技術の充実を図り、もって指導者の資質向上に寄与する目的で講義や実技指導が行われた。

研修1日目

開講式では、主催者として臼井日出男^{うすいひでお}日本武道館理事長が挨拶に立ち、「私の好きな言葉に『3年いたずらに修業をするよりは、3年良き師を探せ』という言葉がある。参加された皆様も良き師を目指して本研修会で得たことを地元を持ち帰って活用いただきたい」と述べた。

続いて、土崎祐一郎^{つちさきゆういちろう}全国高等学校体育連盟剣道専門部部長兼専門委員長が同じく主催者挨拶を、谷勝彦^{たにかつひこ}講師が講師代表挨拶を述べた。

また、1月5日の西日本を対象とした開講式では、臼井理事長に代わり、鈴木達也^{すずきたつや}日本武道館振興部長が主催者挨拶を述べた。

開講式後、香田郡秀^{こうたけし}特別講師による『コロナ禍の審判法と剣道の指導について』の講演が行われた。

香田講師は、「指導者は、勝つだけではなく剣道の理念を念頭に入れて指導いただきたい。そのためには、刀法・身法・心法の鍛錬によって、気剣体の整った剣道を目指すことが重要である。また、審判を行う者は、1本に至るまでの過程や打突の意思、冴

えなど、目に見えないものを総合的に判断できる適応力と対応力を兼ね備えてほしい」とその心構えを説いた。

最後に新型コロナウイルス感染症対策として、長年の課題であった、つば迫り合い問題に着手した経緯などの説明があった後、試合時間内に勝敗が決する試合が増えたことや、試合中に休む時間がなくなり、本当に鍛えた者だけが勝つようになった事例を紹介して結んだ。

続いて、大道場に場所を移して審判法実習が行われた。香田講師からは、「つば迫り合いでお互いに下がるときは、^{いさぎよ}潔く下がり、時間空費しない」、「試合中につば迫り合いで逆交差になることもあるが、2～3回続けば主審は合議を宣告し、反則を取ることにも必要」、「流れの中で逆交差になることもあるが、自分を有利にしようとする作為があるか否を見抜く力が求められる」など、つば迫り合いの対応を中心に指導が行われた。

実技研修では、谷講師による指導のもと、切り返し、打ち込み稽古、回り稽古、講師が元立ちとなつての指導稽古が行われた。稽古後、谷講師より「合気になった時は、講師の気に負けないようにすること。打ち方が2拍子になっているので、1拍子を心がけること」と講評が述べられた。

■研修2日目

朝稽古では、講師が元立ちとなつて指導稽古が行われた後、松田勇人^{まつたゆうじん}講師より「一足一刀の間合いに留意しながら、攻め勝って打つことを目標に掲げて日々の稽古を行うこと」と講評があった。

朝食後の実技指導法では、はじめに谷講師より講話が行われ、生徒が剣道を正しく学ぶためには、①剣の理法、すなわち原理原則を正しく学ぶこと、②練習方法に関連性と発展性を持たせること、③連続性と継続性を持たせることの3点が重要であるとの見解が示された。その後、受講生に防具を装着させ、剣道基本技稽古法の1本目から9本目を実際に打突させながら指導が行われた。

最後に総仕上げとして、回り稽古や指導稽古の実技研修が行われた後、閉講式では、松田講師が講師講評を、土崎全国高体連盟剣道専門部部長兼専門委員長が主催者挨拶を行い、全日程を終了した。